

ジャン・ジャック・バレ教授（ジュネーヴ音楽院）

をお迎えして

七條めぐみ 愛知県立芸術大学音楽学部非常勤講師

本年度、音楽学コースではスイスのジュネーヴ音楽院室内楽科教授のジャン・ジャック・バレ先生を短期外国人客員教授としてお迎えした。バレ教授には2017年12月5日から2018年1月30日にかけて、学部の音楽特講、大学院の特殊研究（音楽学領域）、音楽学コース総合ゼミをはじめ、希望学生グループへの個人レッスンなど、さまざまな科目を担当していただいた。また1月25日には、バレ教授と選抜学生による室内楽のレクチャーコンサートを開催した。本稿では、バレ教授に通訳として付き添った筆者の立場から、滞在中に行った科目等の内容、それに対する学生や一般の方からの反響について報告する。

1. 授業

バレ教授には主に、学部生向けの「音楽特講b」と大学院生向けの「特殊研究(音楽学領域1)」を担当して頂いた。前者は2017年度後期に開講された講義・演習形式の授業で、前半は筆者による室内楽の歴史に関する講義、後半はバレ教授によるレッスンという構成で行なった。受講生は、作曲、音楽学、声楽、ピアノ、弦楽器を専攻する学部生26名で、うち15名がレッスンを受講した。今回の授業では、室内楽の中でも「シューマンとブラームス」、「フランス音楽：フォーレ、ドビュッシー、ラヴェル」をテーマとし、受講生はこれらの作曲家の室内楽作品の一つを選び、バレ教授のレッスンを受けるか、レポート課題を提出した。レッスンを受講したのは必ずしも演奏系の学生だけではなく、作曲と音楽学の一部の学生も演奏者として参加したほか、あるグループでは、作曲コースの学生がブラームスの歌曲を、弦楽器を含む五重奏に編曲する、という参加の形をとった。

本学では弦楽四重奏やピアノ重奏に特化した授業が開講されているが、専攻を横断して室内楽作品のレッスンを受けられる機会は少ない。そのため、学生

の中にはピアノ四重奏やピアノ五重奏に関心はあっても演奏したことがないという人も多い。音楽特講の受講生にも、このような室内楽作品に初めて取り組む学生がいたが、バレ教授から「弦楽器のみのアンサンブル」や「独奏（独唱）とピアノ伴奏」という視点とは異なるレッスンを受け、新鮮さと驚きを感じたようだった。授業後のコメントカードからは、「楽譜に書いてあることを尊重し、互いの音を聴き合うことが大切さだと分かった」などの感想が寄せられた。

一方、大学院向けの特設研究は、12月19日～22日の集中講義として行った。こちらの授業では、博士前期課程の声乐、ピアノ、弦楽器、管楽器の院生6名（ほか共演者3名）が参加し、ショパン、シューマン、ブラームス、シェーンベルク、ベルクの室内楽作品を用意し、レッスンを2回ずつ受講した。どのアンサンブルも集中講義に向けて入念に準備しており、バレ教授がそれに応えるように充実した指導を展開したことから、2回のレッスンの間に豊かで生き生きとしたアンサンブルが出来上がった。バレ教授も、院生グループの仕上がりにとはとても満足していたようで、集中講義を行う過程で、受講生の中からレクチャーコンサートの出演者を選抜することが決定した。

その他にも、バレ教授には12月に音楽学総合ゼミにゲストスピーカーとして来ていただき、2回にわたって、ジュネーヴ音楽院での教育プログラムや現代作曲家との交流についてレクチャーしていただいた。さらに、楽書講読（仏）では3回にわたり、ブラームスとフランクの室内楽作品に関する自身の経験や解釈について、楽譜と音源を交えながら話していただいた。

2. レクチャーコンサート

2018年1月25日（木）18時～、愛知県立芸術大学主催の芸術講座「レクチャーコンサート 室内楽の夕べ——ジャン・ジャック・バレ教授（ジュネーヴ音楽院）をお迎えして」が開催された（図1）。このコンサートのためには、大学院向けの特設研究の受講生と、個別レッスンの受講生から5組のアンサンブルが選抜された。また、鍵盤領域の院生とバレ教授による連弾を用意し、学生によるアンサンブルの前後に配置した。全体のプログラムは以下の通りである。

バッハ＝クルターグ：コラル前奏曲《人みな死すべきもの》BWV 643

ショパン：ピアノ三重奏曲 ト短調 Op.8 から第1楽章

シェーンベルク：《4つの歌曲》Op.2 から 1. 期待、4. 森の日差し

ショスタコーヴィチ：ヴァイオリン・ソナタ Op.134 から第1楽章、第2楽章

デュパルク：《悲しき歌》

(休憩)

ブラームス：ピアノ五重奏曲 ヘ短調 OP.34 から第1楽章、第2楽章

ドヴォルザーク：スラヴ舞曲 より 第1番 ハ長調、第5番 イ長調、第10番 ホ短調

さらに、すべてのプログラム終了後にはアンコールとして、バレ教授とヴァイオリンの院生による、ラフマニノフの《ヴォカリーズ》と、音楽特講の履修生から選抜された学部2年生のグループによる、シューマンのピアノ四重奏曲の第4楽章が演奏された(図2)。今回のコンサートにはおよそ60人が訪れ、学生の演奏とバレ教授との共演に聴き入った。当日配布したアンケートからは、「バラエティ豊かな内容の濃い演奏会で大変良かった」などの声が寄せられた。



図1 レクチャーコンサートのチラシ

3. 個別レッスン

これらの授業やコンサートのほかに、バレ教授は希望グループに対する個別レッスンも行った。その希望者は日を追うごとに増え、1月には1日4グループが来訪することも珍しくなく、合計29グループが受講、2か月間の受講者数はのべ80人にのぼった。中には二度三度と受講を希望する学生も見られ、バレ教授のレッスンがそれだけ魅力的で有意義なものに感じられたということが分かる。レッスンを受けた学生から「デュオの作品でもどちらかに偏ること

なく、音楽全体を指導してくださった」という感想があったように、普段の個人レッスンとは異なる室内楽としてのレッスンが、受講生たちの印象に残ったようだ。



図2 アンコールで共演する院生とバレ教授

4. おわりに

以上のように、バレ教授には2か月の間、授業、個別レッスン、コンサートと多岐にわたって学生の教育に関わっていただいた。滞在後半には、当初は想定していなかった時間帯にも学生を受け入れたが、バレ教授はそのような事態にも快く対応してくださった。筆者の目には、バレ教授の指導により、受講生が回を追うごとに積極的に、明確な意思をもって演奏しているように見えた。

最後に、コンサート後にバレ教授が出演者に送ったメッセージを引用する。

親愛なる音楽家の皆さんへ、

あなたたち皆さんの、音楽に対する温かい心と積極的な姿勢に感謝します。私にとって、あなたたちは一筋の光であり、幸福な瞬間でした。授業やコンサートで見せてくれた、音楽に対する取り組みは、私への素晴らしい贈り物です。私たちは幸運にも普遍的な言語、つまり音楽を分かちあっています。そのことが、私たちのコミュニケーションを助けてくれました。皆さんへ心からの賛辞（ブラボー）を、そしてすばらしい歓迎に、心からお礼を言います。あなたたちの音楽家としての人生に、幸福と成功がありますように。

ジャン・ジャック・バレ